



介護認知症の着段普

ユアハウスに来て約一年

の小野さん(仮名・女性)

は、八十四歳で軽度の認知症があります。感情を表に出す方ではなく、長い時間を机に伏して過ごしてしまし、アルバムを開いて話しかけても、ご自分から話し出すことはほとんどなく、唯一、分かっていたのは「築地の旅館で働いていた」ということでした。

認知症のある方は新しいことを覚えにくい、思い出話などをして、本人が最も輝いていたころを引き出すと良いとされます。しかし過去の記憶が抜け落ち、それが困難なことがあります。うつ状態になり、感情を表現できなくなることもしばしばです。

小野さんの場合がそうでした。ただ、心で話したき

歌舞伎の楽しみ再び

かけて記憶がよみがえるともいわれます。会話から得られる情報が限られる中、小野さんには他にきっかけが必要でした。

そこで「築地へ行ってみませんか？」と持ちかけたところ、「行ってもいいわよ」との答え。決して積極的な返事ではありません。しかし築地市場の移転で街が様変わりすれば、手がかかりも失われるかも…。そう考えた私は、思い切って一緒に現地を訪れました。

それはいわば、小野さんの自分探しの旅。築地に着くと、小野さんは言葉少なに辺りを見回しました。動も、ピンとくる風景はないようです。随分と歩いたため休憩を提案した時、小野さんが初めて、自ら口を開きました。「お茶をしに銀座の方面によく行ってたわ」。素顔が垣間見えた瞬間でした。

さらに銀座へ行く途中に歌舞伎座の前を通った時、少しでも小野さんのことを知りたかった私は、すかさず「歌舞伎はお好きですか」と尋ねました。すると「好きよ。毎月行っていたもの」。そこで後日、ケアマネジャーや「家族」と相談し、チケットを手配することにしました。

小野さんに伝えると「そう」とそっけない返事。しかし事実をのみ込めていない可能性

を考え、記憶と心の扉をたたくように、顔を合わせるたび歌舞伎の話をししました。すると、ある日「もうすぐ歌舞伎ね。誰が出るのかしら」と輝くような笑顔で言ったのです。

そして散策から約四カ月後、念入りに下調べと当日のシミュレーションを行った上で公演日を迎えました。電車では駅員さん、歌舞伎座では係の方に助けてもらい、三階席に落ち着いた小野さん。開演後はオペラグラスを握りしめ、ひと時も顔を伏せることなく、舞台上を見入っていました。

早々に両親を亡くした小野さんは築地の旅館へ奉公に来て、一生懸命に働いたとのこと。当時、歌舞伎といえば、築地の東京劇場。よく聞いていたという舞台の首は、ひたむきに強く歩んだ青春時代を呼び起こさせるようでした。

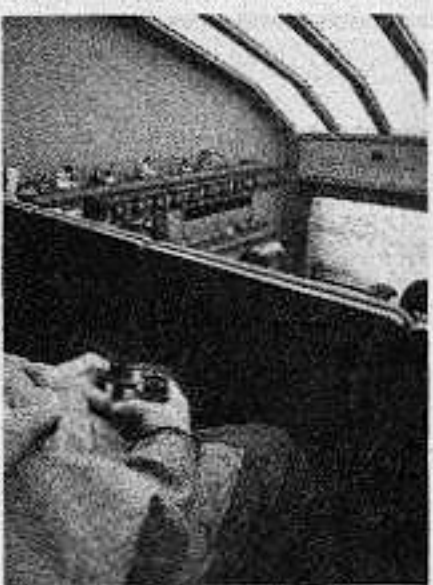
こうして小野さんの中に埋もれていた記憶は、小さな旅によって次々とひもとかれたのです。それ以来、少しずつ自分らしさを取り戻している小野さん。今度は「久々に、浅草に行きたい」のだとか。もちろんです。あなたの過去を、そして未来への楽しみと歩み続ける力を、一緒に探しに出かけましょう！

(岩瀬貞子 介護福祉士
・二十八歳)



小規模多機能型居宅介護事業所「ユアハウス弥生」(東京都文京区)のスタッフが、介護の実践を報告する。

次回は七月二十六日掲載



オペラグラスを手を開演を持つ小野さん 東京都中央区の歌舞伎座で